



Title	徳之島におけるソテツ景観の意味 : 生業活動の組み合わせとその変遷から
Author(s)	金城, 達也; 寺林, 暁良
Citation	研究論集, 12, 469(左)-489(左)
Issue Date	2012-12-26
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/51984
Type	bulletin (article)
File Information	027_KINJO-TERABAYASHI.pdf



[Instructions for use](#)

徳之島におけるソテツ景観の意味

— 生業活動の組み合わせとその変遷から —

金城 達也・寺林 暁良

要 旨

本稿は徳之島における生業活動の組み合わせとその変遷を整理し、そのなかでのソテツの位置づけを明らかにすることを目的とした。

歴史的に見た場合、徳之島の生業は稲作を主体に成り立っていた。同時にサトウキビの生産も重要な位置にあり続けた。また、イモや野菜類は自家用の作物として栽培され、食糧が十分に手に入らない時代には主食のひとつとして重宝されていた。しかしながら現在においては水稲作付は自家用を除いてほとんど営まれなくなった。

そのような状況のなか、徳之島ではソテツの広がる景観が残されてきた。畑地などの空間にソテツが配置されてきた意味も、こうした生業複合のなかで位置づけられる。同時に、徳之島におけるソテツの意義は現在の利用のなかでも位置づけなおすことができる。

その結果、徳之島の人々が歴史的に複合的に生業を組み合わせることで生活をなりたててきたことが明らかになった。そのうえで、現在の徳之島におけるソテツ景観が人々の多様な生業活動の結果として形成されてきたことを指摘し、二次的生業 (Second major subsistence) としてのソテツの可能性について議論した。

1. はじめに

南西諸島特有の景観のひとつとしてサトウキビ畑があげられる。奄美群島の徳之島も同様に、サトウキビ生産が盛んな地域である。ただ、サトウキビ畑のみならず、農作物が栽培されている畑を囲むように植えられたソテツ (*Cycas revoluta*) が織り成す風景は、他の地域ではなかなか見られない特異な景観を創出している。

本稿では、徳之島における生業活動の組み合わせとその変遷を整理し、そのなかでのソテツ

利用の位置づけを明らかにする。そのうえで、現在の徳之島におけるソテツ景観が人々の多様な生業活動の結果として形成されてきたことを指摘する。なお、本稿では特に大正から昭和後期までの生業を中心に論を展開していくが、必要に応じてほかの時代背景も考慮に入れながら記述を進めていく。

これまでの奄美群島における生業研究では稲作が主要な生業として位置づけられることが多かった。また、稲作儀礼と関連付けられてスク寄り¹が意味づけられていることから、一年の周期性が稲作に求められていたことを窺わせる(松山, 2004)。しかし、近年の民俗学や人類学などの成果からも明らかなように、徳之島でも稲作による単一生業によって生活が組み立てられてきたわけではない。そのため、生業複合の視点を取り入れながら、地域社会における生業活動の総体を明らかにしたうえで、多様な営みを人々の生活戦略のなかに位置づけなおさなければならない。

安室(1992)は「時間と空間の変遷を正しく複合パターンの中に反映させることにより、日本の民俗文化を複合パターンの様相から、生計活動の実態を損なうことなく文化類型化することができる」(安室, 1992: 44)と述べ、「生業技術」に偏向していたそれまでの生業研究を批判的に論じた。

人々の生業活動の組み合わせは主要な生業だけでは総合的に捉えることはできない。したがって、「従来は別々に論じられてきた生業技術を人が生きていく上でいかに複合させているかに重点を置く」(安室, 1992: 42)必要がある。松井(1998)が提唱するマイナー・サブシステム²は生業活動を総合的に捉えようとするときに、有効な分析概念として機能する。主要な生業に加えて、人々と自然との多様なかかわりは結果的にひとつの風土を生み出してきた。

関(2003)は新潟県阿賀野川流域集落の人々と河川とのかかわりを事例に「かかわりの自然空間」³が人々と自然との多様なかかわりによって創出されてきた過程を分析し、河川空間が持つ不安定さや曖昧さが人々と自然との多様なかかわりを担保してきた様相を明らかにしている(関, 2003)。

これらの研究に共通する生業複合の視点からは時間的・空間的に人々の生業活動を総合的に捉えることが可能になる。このような観点から見た場合、徳之島における生業活動もまた単一なものではなく、多様な生業活動の組み合わせによって成り立っていることがわかる。しかも主要な生業だけでなく、森林や河川、田畑、サンゴ礁などのさまざまな空間から得られる多様な自然資源をうまく組み合わせる形で利用して生活を組み立ててきた。

歴史的に見た場合、徳之島の生業は稲作を主体に成り立っていた。サトウキビの生産も同時に行われ、水田と畑ではそれぞれの作物が栽培されてきた。また、イモや野菜類は自家用の作物として栽培され、食糧が十分に手に入らない時代には主食のひとつとして重宝されていた。

そのような状況のなか、徳之島ではソテツの広がる景観が残されてきた。畑地などの空間にソテツが配置されてきた意味も、こうした生業複合のなかで位置づけられるべきである。同時

に、徳之島のソテツの意義を現在の利用のなかで位置づけなおすことができると考えている。

本稿で使用するデータは2011年6月～2012年8月までの期間に断続的に行われた調査に基づくものである。調査期間中は地域住民や行政機関、各種関連団体などに聞き取りを行い、必要に応じて参与観察を行った。

2. 事例地概要

本稿の事例地は鹿児島県の奄美群島に属する徳之島である。徳之島は徳之島町、伊仙町、天城町の3つの自治体から構成される。徳之島町は人口11,846人、世帯数5,275(2012年8月1日現在)⁴、伊仙町は人口7,224人、世帯数3,589(2012年1月現在)⁵、天城町は人口6,631人、世帯数3,219(2012年7月1日現在)⁶となっている。本稿の事例地となる集落は基本的に徳之島町と天城町の複数の集落である。

徳之島の面積は約25,000haである。農地面積は6,900haであり、その6割をサトウキビ畑が占める。島の中央部を南北に走る森林帯の面積は11,000haとなっている(小野寺, 2011)。

徳之島を含む奄美群島は歴史的に見た場合、時代ごとにさまざまな行政区に編入されてきた。1266年以降琉球の統治下にあった奄美群島は1609年の島津侵攻によって薩摩藩へ服属することになった。薩摩藩は「砂糖キビを藩直轄の特産品として生産にあたらせ、稲作などを禁止する措置を」(西村, 1999:3)と取り、奄美群島は「自給的食糧生産を禁止され、換金作物として生産された砂糖キビと本土のコメ(蔵米)と不等価交換的物々交換を強制されていた」(西村, 1999:3)。その後の廃藩置県にいたるまでは「爾來社會制度の上に一大變革を來すこととなり、琉球時代の按司地頭の行政組織を改めて代官制を実施し、貨幣の流通を禁止して物の交換に特殊の賣買を行はしめ、甘蔗栽培を強制して耕作の自由を奪ひたる等、産業經濟上に及ぼした影響は甚大」(昇, 1949:245)であったとされる。

1871(明治4)年の廃藩置県により薩摩藩の支配権が衰退することになり、1875(明治8)年には藩政が廃止された。その後、1908(明治41)年の島嶼町村制施行により亀津村、天城村、伊仙村の3村に区画されるが、東天城村の発足により大正5年には4村になった。

終戦後は米軍政下に置かれ、日本本土の行政とは切り離された。そのような状況がしばらく続き、1953(昭和28)年に日本本土の行政下に復帰することになった。1958(昭和33)年に亀津町と東天城村が合併して徳之島町になるなどして島内の行政区の編成が行われ、現在に至っている。

3. 徳之島における生業の変遷

徳之島の主要な生業は稲作によって成り立っていた。1960(昭和35)年には2,000haを超え

ていた水稲作付面積は現在ではほぼゼロになった(小野寺, 2011)。現在では自家用の米を作る水田が若干残されているだけであり、主要な生業としての稲作はすでに行われていない。稲作が衰退した要因については諸説あるが、1961(昭和36)年の農業基本法制定や1970(昭和45)年以降の減反政策は稲作の衰退に拍車をかける形となった(小野寺, 2011)。その後は政府買い上げによって価格がある程度保証されているサトウキビ栽培へほとんどの家庭が移行した。また、平成期に入ると飼料作物や馬鈴薯を栽培する農家が増え、2008年にはどちらの作付面積も1,000 ha までになっている(小野寺, 2011)。

徳之島天城町のA集落でも昭和40年代中頃まではほとんどの家庭が稲作を営んでいた。また畑にはサトウキビやイモなどの農作物も植えられていた。その頃の農作物はほとんどが自家用のものだった。

旧暦2月中旬頃になると集落の背後に聳える天城岳中腹のカシノキに若芽がつく。それを目印に一期作目の種漬けを行っていた。目印になるカシノキは各人で確認するため、種漬けの時期もそれぞれに差が出る場合があるが、大抵の場合には旧正月の前後になる。したがって、種もみを漬ける時期は旧暦の1月20日前後になる。

種もみは1~2晩ほど浸水させ、その後にカマス⁷に入れて温めると白い芽が出てくる。ほぼ同時に水田の代掻きなどを済ませて苗代を準備しておく。苗代に種もみを移すと20~30日で苗が伸びる。旧暦2~3月頃には稲の植え付けが行われる。植え付け後は水田内の草取りなどの作業を行う。稲の収穫は作付けの形態で多少の違いが出る。二期作を営んでいる人は一期作目の稲を早めに収穫する。7~8月頃には稲の収穫を始め、収穫作業とほぼ同時に二期作目の種もみを漬け始めた。夏は苗の生長も早く、7~10日ほどで苗が育った。

その後は水田に苗を植え付け、11~12月には稲を収穫する。なお、一期作のみを作付けする人の収穫は二期作を作る人よりは少し遅い。それでも8~9月初旬までには稲を刈り取った。当時は食糧を保管するための茅葺きの倉が屋敷内に備え付けられており、その中にハッキンドーラ(100斤ずつ詰められた俵)を積み重ねておく。そこから自家用に1俵ずつ出し、玄米を作って杵で突搗き白米にして食べていた。

田植えや草取りは基本的にはユイワクと呼ばれる共同作業で行われていた。場合によっては手間賃を支払って手伝ってもらうこともあった。ユイワクのメンバーは集落内からその都度任意で決められた。ただ、普段から付き合いのある友人同士など、毎年同じメンバーで共同作業をする場合が多かった。ユイワクではメンバー同士の話し合いによって田植えの順番などが決まる。大抵は苗の育ち具合で決まる。苗の生長が早い家庭から先に植えることが多かった。

稲の植え付けから1ヵ月ほど経つと雑草が伸びてくるため草取りなどの作業が行われる。草取りも基本的にはユイワクで行われる。水田に入って手作業で除草していくのは女性の役割であった。除草作業は半日~1日あれば済むが水田の深みに入っている作業になるため足腰にかかる負担は大きかった。しかし、周りのメンバーと話しながら作業を進められるため、少人数の

作業よりは負担が少なく感じられた。田植えや草取りの順番が自分の水田にまわってきたときにメンバーをもてなすのも大事な仕事のひとつであった。午前10時のお茶からはじまり、昼食、午後3時のお茶を出してメンバーをもてなしていた。ときには晩酌まですることもあるが、水田での作業を終えると着衣が濡れていたり汚れていたりするためそのまま家に帰る場合が多かった。

ユイワクのメンバーは田植えをする女性が10人前後と水田を耕したり均したりする男性が4～5人ほどいたため、もてなしをするための食事を作るのが大変だった。田植えのときはタウイドーシバン（田植え雑炊）を大きな鍋で炊き、米と一緒にトーナ（フダンソウ）や豚肉などを入れる。さらに正月に豚を捌いた際に採っておいたワーアブラ（豚の油）を入れて炊いていく。水田近くでドーシバンを食べるときにはツイバー（ツワブキ）の葉を器にするのが昔からの慣わしだった。ツイバーの葉を山などから採り、きれいに洗ってドーシバンを包むと香りが出ておいしく感じられた。

サトウキビは春植えと夏植えに加えて株出しでの作付けが行われる。とはいえ、どちらも必ず植えるというわけではなく、基本的には一期作だった。すなわち畑の使い方によってサトウキビをいつ植えるかを決めていたのである。また畑にはイモも植えられていた。畑地の半分ほどはイモが栽培されており、食糧用と家畜の飼料用に使われていた。そのほかにも麦や野菜類が作られていた。

サトウキビの収穫は3～4月頃である。田植えもいよいよ終盤に差し掛かると、ちょうど同じ頃に製糖期を迎えるのである。田植えの終わり頃と製糖期がほとんど重なるため、この時期は特に忙しい日々を送ることになる。つまり田植えをしながら製糖もするという日々が続くのである。

刈り取ったサトウキビのハカマ（サトウキビの葉）を手作業で取り除き、家に持ち帰って製糖作業をした。自家用製糖のときにはサタグルマ（搾汁用の輪車）を牛に引かせて汁を搾り取り砂糖を作った。このときには砂糖樽（1樽100斤＝60kg）4～5丁ほど作ることができれば良い方だったが、多い人は14～15丁も作った。A集落では組合方式による共同製糖場が一時期設立された。共同製糖は組合員の相互扶助で成り立っており、賃金制で運営されていた。会長や会計、一般労働者などがおり、製糖作業に貢献した分の収入を得ることになるわけである。しかし、第二次世界大戦を契機に共同製糖場は解散し、その後は個人製糖場になっていくことになる。

個人製糖場には刈り取ったサトウキビを各自で持ち込んで製糖を請け負ってもらっていた。ここでは1丁の黒糖を作るのに2日ほどかかった。多い人は14～15丁も出すため、製糖に1ヵ月ほどかかった。

製糖後はC集落の農協に出荷する。それからC集落の港に運んでいった。しかし出荷するまでには砂糖を詰める樽と砂糖そのものに関する検査があり、砂糖樽ごとに等級がつけられてい

く。とはいえ、まずは樽の検査に合格しなければ砂糖を詰めることができない。その検査を通ずると、次は砂糖の検査を受けるのである。

春植えと夏植えのサトウキビを刈り取ったあとは株出しでの作付けが行われる。そのため、除草作業や施肥などが行われる。当時は鋤を使っての作業だったため4～5人ほどでユイワクをして草取り作業をする。この時期には畑と水田の除草作業が重なるため、多忙な日々が続いた。

水田への田植えや製糖期を終えて除草作業などが一段落つくと、集落では豊年祝いが行われる。これは農作物の豊作を祈願する行事であり、旧暦4月末～5月のはじめ頃に行われることが多かった。豊年祝いでは集落の人々がユカイバと呼ばれる広場に集まり、それぞれが一重一瓶を作って料理を持ち寄る。この日はお互いの料理や酒を交換したり、歌ったり踊ったりして豊作を祈る。豊年祝いの日取りは区長や集落の役員の話し合いで決まる。これは単に祭りの日程が決まるということだけではなく、農民にとってはその日までには農作業を一段落させておかないといけないという日取りにもなるわけである。こうして1年の豊作を願い、豊年祝いを境に労働時間に多少の余裕が出る日々が始まるのである。

4. 生業活動と自然資源利用の組み合わせ

4.1. 地域社会における自然資源利用

稲作とサトウキビ生産による砂糖製造は戦前から昭和後半期にかけての主要な生業のひとつとして位置づけられる。また、沿岸集落では漁業も重要な生産手段であった。しかしながら、それらの生産サイクルは必ずしも実際の生活サイクルとは合致せず、ときとして住民や集落は、特有の生活戦略を持って柔軟に対応してきた。それらの営みは個人的なものである場合もあれば集団的なものである場合もあるが、結果として主要な生業の合間に行う営みとして生活を支えてきた。恵原(2009)が著した『奄美生活誌』は主に奄美大島の民衆生活について書かれたものであるが、山や川、サンゴ礁などの自然資源がどのように利用されてきたかが詳細に述べられており、徳之島においても同じような営みが行われてきたことは想像に難くない。

このような営みが行われる場所は山や川、海などありとあらゆる空間が利用される。水田のヤマトウユウ(ドジョウ)やフナ、タニシやサイ(ヌマエビ)などをはじめ、山での山菜採りや狩猟、川漁、サンゴ礁での採貝採草(藻)などはその代表的なものである。特に海辺の集落ではサンゴ礁での採貝採草が現在も頻繁に行われている。徳之島においても干潮の時間帯にはそのような光景を観察することができる。

日々の生活のなかでのサンゴ礁での採貝採草はもちろんのこと、D集落では旧暦3月3日にコーイリ漁をした。コーイリ漁とは魚毒漁のことで、サンゴ礁でのこのような営みは総称してギウナクサン⁸と呼ばれる。この日は大潮のため潮の引きがよく、干潮時にはサンゴ礁に出向

いて採貝採草をする。コーイリ漁は各グループに分かれて行う場合が多い。当日はムジクサゴーマコーと呼ばれる魚毒植物を朝早くからメンバー数名で採取する。ムジクサゴーマコーは畑の周りに生えているものを採った。採取が禁じられている場所などはなかった。カゴいっぱいを用意されたムジクサゴーマコーはいったん家に持ち帰られ、臼に入れて搗き砕かれた。この状態のものをクムイ（潮だまり）に撒き、水面に浮いてきた魚をカゴで掬い上げる。なお、各グループが使うクムイは先着順で決められる。グループによってはメンバーの誰かを先にクムイに向かわせ、利用権を獲得していた。目当ての場所に着くとグループが使用するクムイを主張するために竹を目印として立てていた。

形態に多少の違いはあるが、コーイリ漁は徳之島のほとんどの集落で行われていた。ある集落ではアイムラゴーマコーと呼ばれる魚毒植物が用いられ、またある集落ではイジュの樹皮が利用されていた。その他にもトンニャクやホーグイ、サンショウギやグムル、デリスと呼ばれる植物などが集落ごとに利用されていた。どの集落でも大抵の場合は家族や親戚、近所の人と誘い合っただけで漁に出ており、採捕されたものは各家庭に平等に分けられた。また、コーイリ漁は河川空間でも行われることがあり、ウナギやカワエビ、カニ、川魚などを捕ることができた。

山からはツイバー（ツワブキ）やタラノメ、シイノミ、ヤマモモ、クガ、クイ、ノイチゴ、イチヂク、ギマ、ティアチなどの植物を採って食用にしていた。畑の土手からはグマやマーチャンと呼ばれる植物が採取された。これらのなかには季節性を示す植物が含まれている場合があり、たとえばM集落ではター（サシバ）が渡ってくる時期にはガン（カニ）が山から下りてくるといわれ、この時期はまたマチナバと呼ばれるキノコが採れる時期でもある。したがってこの時期はタンガンやターガンと呼ばれる。

稲作が盛んに行われていた頃までは水田でも種々の営みが行われていた。稲の収穫後には、あらかじめ下調べしておいた水田へ赴いてヤマトウユ（ドジョウ）やタナガ（テナガエビ）、タニシなどを採捕し、大雨が降ったあとには川から流れてきたウナギが捕れることもあった。

4.2. 地域社会における生業活動の組み合わせ

以上のことから、稲作や畑作などの主要な生業とは別に、それらを支える自然資源の利用がなされてきたことがわかる。これらの営みは主要な生業の合間に行うものがほとんどであり、基本的には住民相互の楽しみなどとして行われる場合が多い。しかしこのような営みは必ずしも楽しみとして行われたものではなく、なかには主要な生業のサイクルに実際の生活が間に合わないときの“つなぎ”として利用される場合もある。ここでは先に述べたA集落の生業の組み合わせを事例として地域社会の生活戦略を見てみたい。

A集落では豊年祭を区切りとして稲作や畑作などが一段落つくことは先に述べた。田植えや製糖が終わるためである。しかし、このことは裏を返せばこの時期から数ヶ月間は仕事なくなることを意味している。

この時期はナチゲーワクと呼ばれ、夏枯れを表す。この時期には山野を駆け巡って食糧を集めたといわれるほど仕事のない日々が続く(公民館講座, 1983:66)。すなわちナチゲーワクとは稲作や畑作が一段落つき、1年のうちで最も食べ物が不足する時期のことを指して使われる言葉である。おおよそ旧暦5～7月の2～3ヵ月間がその時期にあたる。

とはいえ、稲作や畑作が一段落ついているので時間配分には余裕がある。そのため、海に魚釣りをしに行ったり、サンゴ礁に出向いて採貝採草に励んだりしていた。魚釣りではアオバチやイラブチ(ブダイ科)、ニバイ(ハタ類)などを捕った。魚釣りに使うえきはサイグラー(ヌマエビ)という小さなエビである。これは早朝に水田へ赴いてあらかじめ採捕しておく。田植え後の水田に水が落ちる場所には水たまりができるため、イビラク(笹)で掬うとそこに集まるサイグラーを捕ることができる。釣り竿はタケを採ってきて作り、釣り糸は購入したが、時には蚕の繭を利用して作ることもあった。

コーイリ漁もこの時期に行われるのが一般的であった。アイグサゴーと呼ばれる植物を採集し、干潮時のクムイで潰して汁を流せば魚が捕れた。魚毒植物にはイジュの樹皮やデリスの根を使うこともあった。コーイリ漁はマーズミと呼ばれる2～3人程度の小規模な組合を形成して行うことが多かった。クサビやカターシ、アオバチ、イラブチ、アイヌクラーなどの魚を捕ることができた。捕った魚は漁に参加した人の間で平等に分けられた。これらの漁獲物は主に自家用として利用された。コーイリ漁に限らず、魚釣りなども夏場に行われることが多く、時間に余裕のある6～7月頃に行われることが多かった。このような営みは前項の各集落の営みと同様に、どちらかといえば楽しみとしての性格が強い。

この時期にはシアミツクと呼ばれる漁も行われた。シアミツクは瀬で網を使って行う漁という意味である。網をクムイの下の方に据えると上の方から飛び込んで魚を追い込んでいく。すなわち追い込み網漁のことで、アオバチやイラブチなどが網に掛かった。この漁は2～3人でもできるが、5～6人いるとちょうどよかった。漁獲物の分け前は網を出す人と追い込みをする人とで違う。網を出した人は網の分が一人前もらえるので、参加者としての取り分と網の分を合わせて二人前の分け前があった。

娯楽としての闘牛もまたこの時期から始まる。闘牛はナクサミ(楽しみ)として住民に親しまれており、農耕用の雄牛に手入れをして闘わせていた。闘牛の日は牛主同士の申し合わせで決まり、当日には弁当を提げて家族と一緒に観戦しに行った。当時の闘牛は柵を設けずに川の中などで闘わせていた。ときには闘牛が観客のなかに突っ込みけが人が出ることもあった。そのため子どもたちはなるべく高台を選んで観戦していた。

ナチゲーワクは上述のように娯楽に興じることができる期間でもあるが、同時に、生活をしていく手段を編み出さなければならない時期でもある。

戦前から戦後にかけて、A集落に隣接するB集落には追い込み漁でトビウオを捕る20～30人ほどの集団がいた。この集団は5組合ほどあった。この組合ではB集落のナカンヤーという

地域に移り住んできたイトマンと呼ばれる漁師たちが親方をしており、戦前は沖縄から連れてきた子どもたちとトビウオ漁をしていた。トビウオの漁期は4～7、8月頃までの夏場がほとんどであったため農家も参加することがあった。

トビウオ漁には組合単位で出る。潮が引き始めると船に乗り込む。300 mほど沖合いに行く。トビウオがいるとされるシューニ（潮根、潮の流れ）で下船する。このとき、2～3匹のトビウオが飛び上がる場合がある。これを見てどこから海に入るかの目印にしていた。

船から下りると潮の流れに乗って流れていく。追い込みをする人たちは10 mほどの間隔ごとに泳ぎ、タナカツキと呼ばれる円形の布陣を組みながらトビウオを追い込んでいく。このとき、トビウオの群れがタナカツキの中にいるのがわかるため、トビウオの群れを逃がさないように囲う。そのまま北上していき、島の北側の集落の沖合まで魚を追い込んでいく。そして円形に組んだ布陣を狭めていき、底側の網を引き上げて袋網の中にさらに追い込んでいく。潮の流れが緩やかなときには漁獲量が少なくなるため、チャーウユギ（泳ぎっぱなし）といって2回目の漁に出ることもあった。そのため、潮の流れは強すぎず緩すぎずが漁に適しているとされていた。潮の流れは専業漁師が確認し、夏場の潮の流れが良いときにはほとんど毎日漁に出ていた。

それぞれの組合は漁に出るメンバーの他に組合長や会計がいて成り立っていた。漁獲物の分け前は会計が決めていた。漁獲物は漁へ参加した人が一人前をもらうのに対して網を出した人と船を出した人はアミダシ、フナダシといって多めに取り分があった。大漁のときには背負いかゴいっぱい魚をもらうこともあった。農家はこの魚を売ることはせず、家に持ち帰って塩漬けにしたり、身を割いて天日に干したりして保存食として利用していた。

B集落でも稲作が主要な生業であったが、魚捕りで食いつなぐ状況があった。これもトビウオ漁に参加したものである。魚を捕ると自分の取り分をもらい、イモなどの農作物と物々交換していた。自家用の魚は売ったり交換したりするものとは別に分けておき、残ったものを全員で分けるなどしていた。魚の取り分は漁の経験の差によって変わる場合もあり、そのような不文律にしたがって組合のなかで分けられていた。多いところでは家族から3～4人が漁に参加することもあった。なお、農作物と物々交換していた魚は基本的には自家用のものであった。その中から家庭で食べる分は分けておき、残りの分を親戚や近隣集落の人たちと交換していたのである。

このような営みは集落によっても違えば個人によっても違う。A集落やB集落ではナチゲワクの時期には「半農半漁」、もしくは主要な生業のなかの「つなぎ」として漁業に参加することによって生計を成り立たせている状況があった。稲作や畑作を主要な生業に位置づけながらも、ナチゲワクなどの時期にはさまざまな生業活動を組み合わせながら生活を組み立てていたのである。すなわち、自然資源や生業活動を行う空間をうまく組み合わせながら利用し、生活を営んできたといえる。

5. 生業複合とマイナー・サブシステムの狭間 — ソテツ利用史からみる自然資源の新たな可能性

5.1. ソテツ (*Cycas revoluta*) の概要

以上見たように、徳之島の各集落における人々は複数の生業活動を組み合わせることによって生活を組み立ててきた。主要な生業によって得られた農作物や魚介類は重要な現金収入源になったり、場合によっては物々交換の対象になったりした。また、山野川海などから採れる多様な自然資源は生活を支えるために必要な資源であった。

本稿で対象としている時代設定において、徳之島の各集落の人々の生活戦略としてソテツは重要な資源として位置づけられる。ここではソテツ資源利用について記述し、これまで見てきた生業複合のなかでのソテツ利用の位置づけを明らかにしていきたい。

『沖縄大百科事典』(1983)によるとソテツ (*Cycas revoluta*) は「ソテツ科の常緑椰子状小低木で、高さはおよそ5mになる。幹は太く鱗片状の葉痕におおわれ、単幹または根元付近で分枝する。葉は羽状複葉、幹の先端部に束生し、長さ70~140cm、上面は濃緑色で光沢があり、裂片の先端は棘状である」(沖縄大百科事典刊行事務局, 1983: 629)。日本では九州南部および南西諸島に分布し、中国の一部の地域での自然分布も確認されている。



図1 ソテツ (左:雄株, 右:雌株)

5.2. ソテツの植樹と毒抜き技術

徳之島にいつ頃ソテツが入ってきたのかについては諸説あるが、『徳之島小史』(1917)には以下のような伝承が掲載されている。

射的の名人はじめて蘇鉄を持来る

今を去ること四百年前手々村に政勝と云ふ射的の名人あり大島諸鈍城に開催されし射的の大会へ選手に抜擢せられて出會し数百間の先方にある而かも風に動いて止まざる「サンキ

ラ」(植物名)を一回にて一寸、二回にて二寸、三回にて三寸、四回にて四寸、五回にて五寸、射切りければ大に賞讃せられ城主より賞として小銃を授けらる政勝喜ぶかと思ふと之を断り庭園にある蘇鉄を与へられよと請ふ城主は政勝の請ふが儘々与へたり政勝之を持帰へりて手々の自宅に植附けたり之れ当島蘇鉄の元祖なり其蘇鉄は今猶薑々として昔を語り居るものの如し。

(坂井友直, 1917, 『徳之島小史』: 89)

以上のように徳之島にソテツが入ってきた経路は伝承レベルで伝えられており、手々集落では政勝が持ち帰ったとされるソテツが植えられている屋敷跡を確認することができる。

琉球王府時代には、当時の為政者である蔡温によってソテツの植樹が指導されている(仲地ほか, 1983)。南西諸島の各地域にソテツが植樹されていくのは政治的には蔡温による指導が大きいと思われ、以下のような通達がなされている。

貯

- 一、凶年之節年貢致未進其身も及飢候儀、畢竟常式貯無之故ニ而候。依之徒之費不仕随分守儉約、連々申渡置候通り年々貯え仕候儀、油断有間敷事。
- 一、蘇鉄之儀凶年之補ニ相成、別而重宝之物ニ候間弥漸々植重候様可致候。拵様は別さつニ記相渡候通可仕事。
- 一、はんつ芋之儀、余計有之節は干調飯米之貯可致置候。干調候仕様は、去亥年別冊ニ記置候通り可相調事。

(仲地ほか, 1983, 『日本農書全集 34』「農務帳」: 11)

蔡温によるソテツ植樹の指導は『農務帳』の中の「貯」に記載されており、その内容は仲地ら(1983)が訳したものに倣うと次のようになる。「そてつは凶作の年の補助食として特別に重宝なものなので、つぎつぎと植え続けるようにすること。その調理法は、別冊に書いて渡したようにすること。」(仲地ほか, 1983: 11)。すなわち、この時代には救荒作物としてソテツが植樹されていたことがわかる。

ソテツはサイカシン(cycasin)という有毒成分を含んでいるため、毒抜きを適切に行わなければ食用としては利用できない。そのことを象徴するように、大正14年には生活難からソテツを食糧として利用した一族6名が、毒抜きが不十分であったため中毒死する事件が起こっている(1925年8月2日付、鹿児島朝日新聞)。このような事故を防ぐため、ソテツの毒抜きの方法が別冊で首里王府の高所によって出されている(小野, 1932)。

ソテツの毒抜きの方法は政府によって出されているが、地域によってはその方法が若干異なる場合がある。安溪(2011)は地域ごとのソテツの毒抜きの方法の違いを見るなかで、中央政

府からの距離によって毒抜き技術の違いが見られることを指摘している。また、上江洲(1985, 1987)は徳之島の地域社会におけるソテツの利用方法の聞き取りを行っている。これらの研究は地域によるソテツの利用方法が多様であることを示唆させる。しかしながら、これらの研究は生業技術を対象とした研究として位置づけられ、地域社会によって実際にソテツがどのように利用されてきたのかを明らかにするまでには至っていない。生業技術を分析の対象にするだけでは、生業の全体の中でのソテツの位置づけが明確にできないし、人々の生活戦略としてソテツがどのように利用されてきたのかを分析の対象に含めることがきわめて難しくなる。したがって、地域社会によって実際にどのようにソテツの利用がなされていたのかを明らかにしていくとともに、生業ないし生活戦略の中でソテツがどのように位置づけられているのかを検討することが必要になる。

5.3. 「蘇鉄地獄」と地域社会の生活戦略

5.3.1. 「蘇鉄地獄」とは何か

1914年に勃発した第一次世界大戦によって撤退したヨーロッパ列強に代わり、日本はアジアの市場を独占することになった。軍需品や鉱産物などの大量輸出によって景気は回復し、日本の工業の発達をも促していくことになった。沖縄をはじめとする南西諸島も第一次大戦による好景気に沸き、特産物の砂糖で利益をあげるようになった。しかしその後の黒糖相場の暴落にあった沖縄などの地域は、糖業に依存した社会構造的な脆弱性もあって景気の悪化が県経済全体に波及していくことになる。

1922年以降は沖縄銀行や沖縄産業銀行、那覇商業銀行の3行が相次いで破綻し、1925年にはこの3行の合併により沖縄興業銀行設立されることになった。これらを契機として沖縄は一連の金融危機に追い込まれていった。

この一連の流れに追い討ちをかけるように、1929年にアメリカで発生した世界恐慌の影響が日本経済にも波及し、1930年には日本全国の農村が昭和恐慌に襲われることになった。これらの経済危機は沖縄経済にも影響を及ぼし、豊み掛けるように沖縄経済を逼迫させていった。

第一次世界大戦後から起こったこれらの金融危機は経済・社会を疲弊させ、沖縄をはじめとする南西諸島の人々は、米はもとより常食としていた甘藷さえも確保することが困難な状況に追い込まれることになった。このような一連の流れのなかで、南西諸島の人々はソテツを食糧として利用し、毒抜きが不十分であったソテツを食用とした家庭では中毒死者を出すなどして生活難を象徴するような状況が作り出されていった。このような状況を受け、当時の新聞記者などによって「蘇鉄地獄」という言葉が生み出され、第一次世界大戦後の金融危機を契機とした一連の金融危機の時代は「蘇鉄地獄」の時代として定着していくことになった。

ここで注意しておきたいのは、「蘇鉄地獄」という言葉が象徴するのはあくまでも当時の社会情勢を表したものであるということである。当時の社会情勢は深刻な食糧不足を招いたのかも

しれないが、ソテツそのものは救荒作物として利用されただけであって、毒抜きが不十分であったソテツを食用とした家庭で死者が出たという一部の事例によって印象づけられており、そのことから「蘇鉄地獄」と表現するには疑問が残る。しかしながら、たとえば、1927（昭和2）年8月9日付の南海日日新聞では「貧困に喘ぐ蘇鉄地獄へ 勅使を差遣はさる」という記事が書かれており、当時の南西諸島の窮状が示されている。このことから窺えるように、外部社会から与えられた当時の社会情勢を象徴する「蘇鉄地獄」という言葉は自然（資源）としてのソテツに対してネガティブなイメージを与えるには十分であった。

5.3.2. 徳之島におけるソテツ利用史 — 交易を中心に

現在の徳之島を見渡してみると、多くの畑地の畦にはソテツが植えられており、隣接する畑との境界線として機能している。歴史的にみた場合、徳之島のほとんどの家庭では自分の畑の畦に植えられたソテツが利用されてきた。

戦前の徳之島におけるソテツの利用は保存食や調味料としてのソテツ味噌作りなどが主だった。ソテツ味噌はナリミソやナイミソと呼ばれ、基本的にはソテツの種子を利用して作られていた。ナリミソは基本的には各家庭で作られていたが、依頼があった際には隣近所の家庭との共同作業で作られる場合もあった。ナリミソを作るための種子採取から味噌を作るまでの共同作業をナエヌギやナイヌギといった。こうして依頼のあった家庭のソテツから共同作業で種子を採取し、味噌作りが行われた。また、凶作の年には救荒作物としてソテツは重宝され、食用として利用されてきた。凶作の年に食用とされていたのは基本的にはドテと呼ばれるソテツの幹の部分である。ソテツをドテごと引き抜き、中心部にある芯の部分の毒抜きして粉末化し、団子やお粥にして食べていた。

戦後すぐの時代には南西諸島でも例外なく食糧不足が深刻であった。徳之島では戦前の凶作の年と同様にドテの部分は重宝され、毒抜きの作業をした後に団子やお粥にして食べるのが一般的であった。また、種子がある場合には採取し、二つに割ったものを毒抜きしてやはりお粥などに混ぜて食用としていた。

一方、現金獲得の手段がほとんどなかった戦後すぐの時代には、ソテツは近隣集落や海外などの物々交換や現金獲得のための重要な資源でもあった。徳之島町のE集落ではソテツの幹から生える不定芽や比較的小さいソテツの幹を採取し、中国や台湾などの商人に売りさばっていた。当時は現金収入を得る手段がほとんどなく、ソテツをめぐる海外交易は当時としては貴重な現金取引であった。中国や台湾などから来た商人たちは集落の区長などに協力してもらいながら住民たちからソテツの幹や芽を買い付けていた。当時は徳之島町の母間港や山港、伊仙町の鹿浦港などが主に利用されており、海外から来た商人たちはソテツを買い付けると近くの港から船に積み込み海外へ輸出していた。

海外交易などを介した現金獲得の手段として重要な資源だったのがソテツの幹や不定芽だったのに対し、近隣集落などの物々交換の対象になったのは主に種子の部分であった。徳之島

町の E 集落から F 集落へソテツの種子を出し、F 集落から E 集落へは米やイモを出すという具合である。また、天城町の G 集落から徳之島町の H 集落へ子豚などを出し、徳之島町の H 集落から天城町の G 集落へソテツの種子を出すなど、隣町との交易も盛んに行われていた。とはいえ、隣町まで行くには山を越えなければならず、山道を歩いての往来はかなりの時間を要した。当時はソテツ焼酎の製造が禁止されていたため、取り締まりの人が山道を見回っていることがあった。そのため、荷物を持って山道を往来するときには見つからないように気をつけなければならず、目的地の H 集落の人々が農作業を引き上げる時間帯に紛れ込んで隣町に行くこともあった。その際には道中で薪などを拾いながら行くことで、監視員に薪拾いが目的だと思わせてすり抜けるときもあった。その夜は H 集落に宿泊し、翌日の夜明けとともに再び山道を歩いて帰ってきた。天城町の I 集落も同様に徳之島町の H 集落と交易があった。この 2 集落間の交易は I 集落から H 集落へ米を、H 集落から I 集落へはソテツの種子が出されており、この場合の種子もそのままの場合と粉末にしたものがあつた。I 集落の人々は背負いカゴに米を入れて牛に担がせ、山道を通って H 集落まで行っていた。米とソテツの種子を交換する場合の対価は米 20 kg 程度に対してソテツの種子が 10 kg 程度であつた。また、物々交換ではソテツの種子が重宝されていたように見えるが、ソテツの種子を多く採取できる集落に米がなかった場合には、米をもらうためにソテツの種子を持って隣町の集落を訪れることもあつた。米が豊富に収穫できる天城町の J 集落には米の収穫量が比較的小さい徳之島町の K 集落の人々がソテツの種子を持ってきては米と交換して帰って行った。

ソテツの種子は必ずしも物々交換の対象であつたわけではなく、ときには現金によって売買されることもあつた。たとえば、天城町の L 集落は同町内の D 集落からソテツの種子を購入していた。当時の相場でソテツの種子が一斗缶 1 杯分で 10 円程度であつた。購入したソテツの種子は水に晒して毒を抜き、残った供出米と合わせて味噌を作っていた。近隣集落から購入したソテツの種子を使った味噌作りは 1 年に 3 回程度行われた。

交易の対象になつたのはモノだけではなく、ある集落からある集落へ小作人として働きに出た場合、その報酬としてソテツの種子を得ることもあつた。すなわち労働力とソテツが交換の対象となつていたわけである。

ここで注意しておきたいのは、ソテツの種子を近隣集落や隣町、島外などへ出す場合には採取した種子をそのまま出す場合と、いったん毒抜きの作業を施して粉末化されたものを出す場合とがあつたことである。時々、集落や自分の土地にソテツがあるにもかかわらず、近隣集落や隣町などと交換している場合がある。この場合はソテツの毒抜き技術の知識が豊富な近隣集落や隣町などに種子を調製してもらい、毒抜きされたソテツの種子や粉末化されたものを交換の対象にしている。すなわちこれは技術の交易とってよいだろう。隣町からソテツの種子や粉末化したものを交換していた G 集落で聞かれた次のような語りはそのことを窺わせてくれる。

「小学校時代にソテツを食べた同じクラスの子が突然苦しみ出して、嘔吐が止まらなくなった。これが本当にかわいそうでね」⁹

集落や家庭によっては毒抜き技術に不安が残る場合もあり、安全に食べられる程度にまで毒抜きの作業を施してくれる近隣集落や隣町に毒抜きの技術を頼ることがあった。このことからわかるように、近隣集落や隣町とのソテツをめぐる物々交換は単純にモノだけを対象にした交易ではなく、技術なども対象になっていたといえる。

昭和後半期に入ると本土からモノや食糧などが入ってくるようになり、食糧や調味料としてのソテツの価値が次第に減少していくことになる。また、農業の機械化や昭和後半期からはじまった土地改良事業の影響もあり、ほとんどの集落では畑の畦に植えられたソテツが次々と取り除かれていくことになった。たとえば、ある集落では畑の畦からすべてのソテツを引き抜くアゼハズシという作業が行われ、取り除いたソテツは各方面へ売られていった。

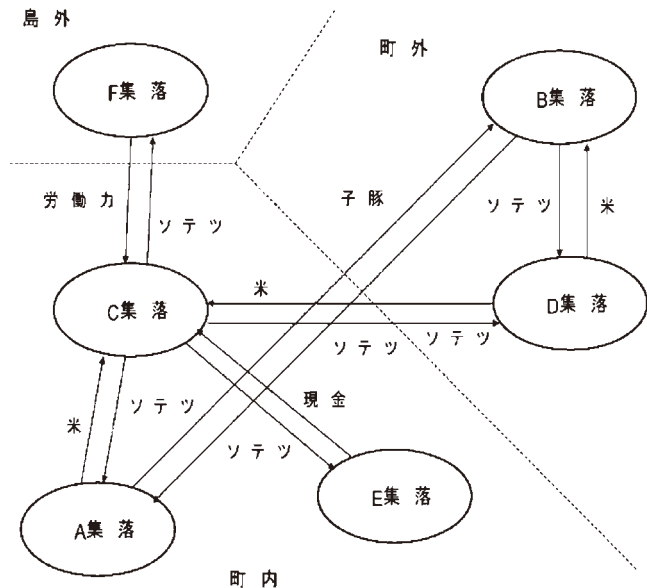


図2 ソテツ種子をめぐる交易

5.3.3. 現在におけるソテツの利用

5.3.3.1. 種子の採集と輸出

以上見たように、昭和後半期には時代の趨勢に合わるようにソテツの利用が減少していくことになる。それは一見、ソテツの価値が失われていくようにも思われるが実はそうではなく、現在でもソテツは住民にとって貴重な資源として利用されている。

徳之島では現在でも一部の人々によってナリミソが作られており、地元の小売店などで販売されているが、ここでは特にソテツの種子をめぐる現在の交易について記述していく。

徳之島では現在においても畑の畦に植えられたソテツを目にすることができる。昭和後半期の土地改良事業や集落自治組織によるアゼハズシによってソテツが減少している地域もあるが、それでもなおソテツが織り成す景観は維持されている。

救荒作物として植えられていった徳之島のソテツは、隣の畑との境界線や作物への潮風害などを避けるために植えられている側面もある。また、葉の部分は農作物の肥料になったり、燃

料革命以前には焚きつけにしたりして重宝されていた。また、現在では葉野菜などがまだ小さいときの防風柵として用いられたりする。

徳之島町や天城町の一部の集落ではソテツの種子を採取し、中間業者に出荷することで現金収入を得ている世帯がある。中間業者から国内外へ輸出され、輸出先の各地域ではさまざまな用途で利用されている。

現在の徳之島町 E 集落では 10 世帯程度がソテツの種子を採集して出荷している。ソテツの種子は現在でも畑の畦に植えられ、出荷されている種子のほとんどがそこから採集されたものである。

各世帯の畑に植えられているソテツは 6～7 月頃にカフンツケと呼ばれる受粉作業が行われる。南西諸島の梅雨明けは本土と比べて早い。その頃からボウズと呼ばれるソテツの雄花を目にすることができる。雄花が 50～60 cm ほどに成長すると採取し、芯だけを残して粉砕する。ソテツは大きいものになると 4～5 m 程にまで成長するので、加工して長さを加えた柄杓や脚立などが利用され雄花が採取される。雄花は原則としては自分の畑から採取するが、量が足りなかったり、成長が足りなかったりして不足が生じた場合には他人の畑などからも採ることができる。粉砕した雄花を今度は雌花の上にふりかけていくと受粉作業は終了である。しかしながら、各世帯が所有しているソテツはほとんどの畑に植えられているので、すべてのソテツの受粉作業を終えるには一か月ほどの期間を要する。自然交配と人工交配では種子の収穫量に 3 倍ほどの差が出る場合もある。しかし、台風などで花粉が飛ばされた年には豊作になる場合が多い。

受粉作業から種子の採取時期までは基本的にソテツは放ったらかしである。時々、伸びすぎた葉や下草を伐採する程度である。11～12 月には雌株に種子がつきはじめるので、採集作業がはじまる。出荷先の中間業者から採集するように声がかかるのに合わせて採集作業は行われる。雌花についての種子に関しては自分の畑に植えられているソテツからしか採ることができない。また、自分の畑に根付いていれば採っても良いというわけでもなく、幹が曲がるなどして隣の畑にはみ出している場合はそのソテツからの種子採取はできない

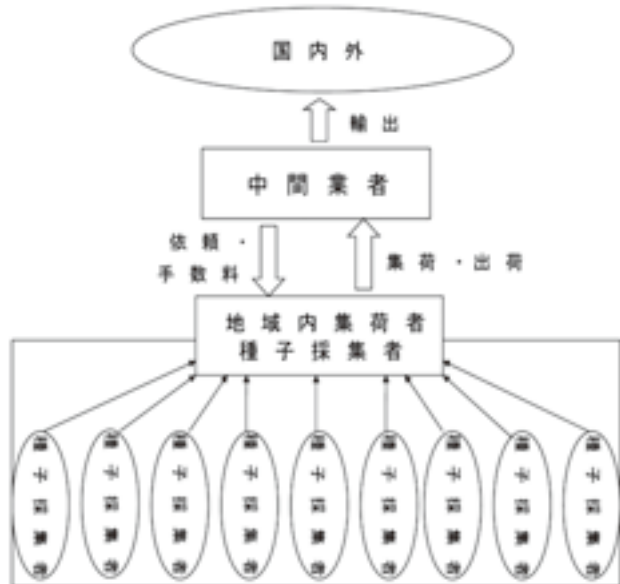


図3 ソテツ種子採集から輸出

など、雄花とは違って比較的厳しい不文律が存在する。各世帯によって集められたソテツの種子は一袋 30 kg の袋に詰められ、地域内の集荷者によって 1 ヶ所に集められる。地域内集荷者は中間業者によって依頼される形で決まり、集荷者には一袋単位で中間業者から手数料が支払われる。その際に支払われる手数料はその年のソテツのレートなどで決まってくる。

地域内集荷者によって 1 ヶ所に集められたソテツの種子は、輸出の日程が決まると中間業者が受け取りに来る。その後、中間業者によって船に乗せられ、輸出されていく。輸出先は主に海外である。2008 年 12 月 26 日付の日本経済新聞によると、奄美群島で収穫されたソテツの種子はいったんコスタリカやホンジュラスで苗木に仕立てられ、鉢植えや街路樹にするために欧州などの国々へ出されており、奄美や沖縄の業者からは韓国や中国へも輸出されている。また、アフリカやオーストラリアでは砂漠の緑化にも活用されている。2008 年 3 月 17 日付の西部読売新聞には奄美大島の瀬戸内町で収穫されたソテツの種子がオーストラリアに渡り、現地での砂漠緑化のために利用されていることが書かれており、地球温暖化や砂漠化などの地球環境問題を解決する策のひとつとして奄美地方で収穫されたソテツの種子が期待されている。

5.3.3.2. 各世帯におけるソテツの位置づけ

各世帯が採集したソテツの種子に対して支払われる金額は年によって異なるが、高いときには 60 kg で 1 万円ほどの値がついた年もある。最近では 30 kg で 2,500~3,000 円のところで推移している。しかしながら、世帯によっては年に数百袋の種子を出すため、かなりの現金収入になる。また、種子の採取時期は正月などの入用の時期と重なる場合が多いので、経済的にも家計を助ける手段として位置づけられてきた。

「その時期はサトウキビも採れんからな。そういうお金が入ってくるから助かる。それで正月入用」¹⁰

以上のように、ソテツ種子採集による収入はあくまでも副収入として位置づけられている。他にも「この集落なんかはものすごくいいよ。正月前のいい小遣いよ。ボーナス代わり」¹¹「だからだ、いぶソテツには助けられてるよね、私たちなんかは」¹²と語られるなど、たいてい家庭では主要な生業の“おまけ”や“ついで”のようなものとして位置づけられていることがわかる。

また、副収入として位置づけられているにもかかわらず、生計を占める割合としては必ずしも小さなものではない。

「主要な生業と比べても収入は大きいね。肥やし代も要らんし。台風の災害もない。台風が吹こうが何しようが防風ネットかける必要もない」¹³

ソテツの植物としての性質から収入に対するコストが低いこともあり、種子採取による収入は主要な生業と比べても生計を維持するうえでの割合は大きなものとして認識されていることがわかる。

徳之島でソテツの種子を輸出する中間業者は複数あるが、たいていの場合は知り合いを通じての依頼だったり、もともと知り合いだった人から声をかけられたりすることが多い。年によってはべつの業者に高値を提示されて出荷を依頼される場合があるが、すでに馴染みの業者があるということであることが多い。

「今年はA業者よりちょっと高いから僕の入れ物を持ってこようかって言いよったわけよ。でもだめだって、A業者をそっぽにするのは僕はいやだから」¹⁴

ソテツ種子の出荷先をめぐることは単純に儲かる方が選ばれるわけではなく、これまでの関係性の中で業者が選択されている側面もある。また、ある世帯では「馴染みの業者じゃなくても知ってる人が集めてるときは分けて出すよ。30袋あるならあなたには5袋、あなたには10袋とか。自分にわけてくれなかったら『あれはあっちにばかり出してる』ってなるから」¹⁵というように、知人がかかわっている場合には融通をきかせて柔軟に出荷先を変えることで社会関係を維持させている。すなわち、現在のソテツ利用から見た場合、ソテツは家計を支える副収入として重要な位置づけを持っているだけでなく、種子採集者が出荷先などとの関係性をうまく保てるような柔軟な対応を採用しており、そういった関係性がソテツの種子を持続的に出荷していくことを保証しているとも言い換えられるだろう。

5.4. 二次的生業 (Second major subsistence) としてのソテツの可能性

以上見たように、徳之島の人々は主要な生業とマイナー・サブシステムなどの自然資源利用をうまく組み合わせ、それらを複合的に行うことで生活を成り立たせていた。ソテツに関しては特に、近隣集落や隣町などとの物々交換や現金取引、海外との交易では貴重な現金収入源になるなど、徳之島の人々にとっては歴史的にも重要な資源であった。一方、戦後の食糧難の時代には「蘇鉄地獄」という言葉で表されるように外部社会からはネガティブなイメージを持つ資源として価値づけされてきた。しかしながら、本稿で見てきたように、ソテツは外部社会からのイメージとは異なり、地域社会の人々によって日常的に利用されるだけでなく、食糧難などの厳しい時代には物々交換や現金取引を介して生活を組み立てるなど、生活戦略の一部を担う資源として重要な位置づけを持っていた。また、現在の利用状況からもわかるように、ソテツの種子採集は主要な生業を支える二次的な生業として営まれ、生計を維持するための資源として持続的に利用されている。そのような重要性が、徳之島のソテツ景観を形成するとともに、資源利用の変遷の中で常に組み替えられ、その中でソテツ景観の社会的な意味の大きさ

は現在も失われていない。

本稿で取り上げてきたソテツのように、ある世帯の生活戦略や生計維持にとって重要な経済的な意味を持ちながらも主要な生業には位置づけられず、歴史的にはあくまでも主要な生業を支える資源として機能してきた営みを二次的生業（Second major subsistence）と呼んでおきたい。

二次的生業は主要な生業の成果が得られにくい際のセーフティネットとして機能するだけでなく、経済的な側面でも生計を支える役割を担うことができる。徳之島のソテツは歴史的に利用されるだけでなく、独自の流通経路を構築することで現在でも持続的に利用されていると考えられる。しかしながら、本稿で取り上げてきたソテツは主要な生業とは異なり1年ごとに種子をつけることや、豊作と凶作の年があるなど安定的な供給が難しいということもあり、主要な生業として位置づけられにくい側面もある。また、現在の利用状況から見た場合にはソテツは外部社会からの需要によって二次的生業として成り立っている側面もあるため、需要と供給のバランスをいかに保っていくかも課題となる。とはいえ、ソテツは歴史的に見た場合には地域社会の生業や資源利用の変遷のなかで時代に応じた社会関係が人々によって常に築きあげられながら戦略的に利用されてきた。現在においても二次的生業として機能するなどソテツ景観の社会的な意味は大きい。徳之島でソテツの広がる景観が残されてきたことや空間にソテツが配置されてきた意味も、こうした生業複合のなかで位置づけられるべきである。

6. おわりに

本稿ではまず、徳之島の人々が複数の生業を同時に行うことによって生活を組み立ててきたことを明らかにしてきた。また、マイナー・サブシステムのようにならぬ経済的にはあまり意味を持たないが人々の生活の幅を広げてきた自然資源利用について整理を行い、主要な生業と自然資源利用の組み合わせを見てきた。

その中でもソテツ利用に関しては特異的であり、歴史的にも人々の生活を組み立てるうえで重要な位置づけを持っていた。また、現在においてもソテツは人々の生活戦略や生計維持にとって重要な価値や位置づけを持っており、徳之島における人々のソテツ利用が現在の徳之島のソテツ景観を作り出してきたことを指摘するとともに、二次的生業（Second major subsistence）の可能性について議論した。ただし、本稿においては課題も多く、世帯単位の主要な生業の収入に対する二次的生業の収入の具体的な割合や二次的生業がなぜ主要な生業として成り立たないのかなども含めて検討される余地はある。今後は二次的生業の社会的役割をはじめ、実証的かつ理論的な研究の蓄積が必要であるとともに、地域社会の生活戦略や生業複合における自然資源の位置づけの濃淡などもあわせて考えられなければならない。

(きんじょう たつや・人間システム科学専攻)

(てらばやし あきら・人間システム科学専攻)

注

- ¹ スクはアイゴ科の稚魚。一年に数回サンゴ礁内に群れて寄ってくる。松山(2004)によれば、水稻の収穫感謝を捧げるサンゴ礁内の潮だまりとスクの捕り始めの儀礼が行われる潮だまりが隣接していたことから「水稻文化は人々の目に見えるシユクの寄りという自然現象の媒介によって、はるか彼方のネイラと結ばれていた」(松山, 2004: 54-55)と述べ、稲作とスクの寄りが関連付けられている。
- ² 松井(1998)は「集団にとって最重要とされている生業活動の陰にありながら、それでもなお脈々と受け継がれてきている副次的ですらないような経済的意味しか与えられていない生業活動」(松井, 1998: 248)をマイナー・サブシステム(minor subsistence)という概念で説明している。
- ³ 関(2003)は「『かかわり』のあり方が画一的であるところに風土が存在するというのではなく、むしろ、多様な『かかわり』が交錯したところに風土が生まれてゆく」(関, 2003: 58)と指摘し、人々と自然との多様な「かかわり」が交錯する空間を「かかわりの自然空間(Nature Space of the relations)」と呼んでいる。
- ⁴ <http://www.tokunoshima-town.org/>
- ⁵ <http://www.town.isen.kagoshima.jp/>
- ⁶ <http://www.yui-amagi.com/modules/pico/>
- ⁷ 藁むしろで作られた袋。
- ⁸ ギュウナクサンを直訳するとギュウ(魚)ナクサン(楽しみや癒し)という意味になる。すなわち海での採貝採草(藻)や釣り漁などのことである。言葉通り、これらの営みはあくまでも遊びや楽しみとして認識されており、経済的な意味づけはほとんどされていない。このような営みはマイナー・サブシステムの典型的な例として位置づけられる。
- ⁹ 2012年3月8日 K. K.氏への聞き取りから。
- ¹⁰ 2012年3月9日 M. M.氏への聞き取りによる。
- ¹¹ 2012年3月9日 T. S.氏への聞き取りによる。
- ¹² 2012年3月9日 T. R.氏への聞き取りによる。
- ¹³ 2012年7月20日 Y. H.氏への聞き取りによる。
- ¹⁴ 2012年2月18日 T. T.氏, T. M.氏への聞き取りによる。
- ¹⁵ 2012年3月9日 T. S.氏, T. R.氏への聞き取りによる。

文献

- 安溪貴子, 2011, 「ソテツの来た道 毒抜き of 地理的分布から見たもうひとつの奄美・沖縄史」安溪遊地・当山昌直編『奄美沖縄 環境史資料集成』南方新社。
- 上江洲均, 1985, 「徳之島におけるソテツ利用について」沖縄国際大学南島文化研究所編『徳之島調査報告(3)——地域研究シリーズ No. 8』沖縄国際大学南島文化研究所。
- 上江洲均, 1987, 『南島の民俗文化 生活・祭り・技術の風景』ひるぎ社。
- 恵原義盛, 2009, 『復刻 奄美生活誌』, 南方新社。

- 沖縄大百科事典刊行事務局編，1983，『沖縄大百科事典 中巻』，沖縄タイムス社。
- 小野武夫，1932，『近世地方経済史料』第九巻，近世地方経済史料刊行会。
- 小野寺浩，2011，「徳之島の力」鹿児島大学鹿児島環境学研究会編『鹿児島環境学Ⅲ』：47-77。
- 鹿児島朝日新聞，1925，「生活難の悲劇 蘇鉄の中毒から」8月2日付。
- 公民館講座，1983，『岡前誌』，公民館講座。
- 坂井友直，1917，『徳之島小史』奄美社。
- 西部読売新聞，2008，「奄美のソテツ 豪で砂漠緑化 飢饉しのぎ，今や地球守る」3月17日付。
- 関礼子，2003，「生業活動と『かわりの自然空間』——曖昧で不安定な河川空間をめぐって」『国立歴史民俗博物館研究報告』第105集：57-87。
- 仲地哲夫ほか，1983，『日本農書全集 34』「農務帳」農山漁村文化協会。
- 南海日日新聞，1927，「貧困に喘く蘇鉄地獄へ 勅使を差遣はさる」8月9日付。
- 西村貢，1999，「奄美群島地域経済開発政策の構造的特徴」鹿児島県立短期大学地域研究所編『奄美群島の経済社会の変容』：1-18。
- 日本経済新聞，2008，「街路樹・砂漠緑化に活用 ソテツの実，海外で人気——奄美で収穫真っ盛り」12月26日付。
- 昇曙夢，1949，『大奄美史』，奄美社。
- 松井健，1998，「マイナー・サブシステムの世界——民俗世界における労働・自然・身体」篠原徹編『現代民俗学の視点1 民俗の技術』：247-268。
- 松山光秀，2004，『徳之島の民俗2 コーラルの海のめぐみ』，未来社。
- 安室知，1992，「存在感なき生業研究のこれから——方法としての複合生業論——」『日本民俗学』190：38-55。

WEB

- <http://www.tokunoshima-town.org/>
- <http://www.town.isen.kagoshima.jp/>
- <http://www.yui-amagi.com/modules/pico/>